心身障害児の親子関係に関する研究

長畑正道(筑波大学心身障害学系)
田中信介、幾瀬　貫(杏林大学小児科)

研究のまとめおよび「腹痛を主訴として入院したいじめっ子の親子関係」

心身障害には精神遅滞、肢体不自由、視覚障害、聴覚障害のほかに情緒障害がある。このような状態の障害児の親子関係を考えるときには、狭義の情緒障害とそれ以外の心身障害とではかなり異なった側面がある。これまで、重度心身障害ないしダウン症を含む精神遅滞および自閉症の親子関係の問題と、登校拒否、神経性食欲不振症、さらに子供を代理としたMunchansen症候群について、その親子関係について検討して来た。今回はこれまでの研究のまとめと、とくに最近問題となっている「いじめ」の背景についてその親子関係に焦点をおいて報告する。

Ⅰ．精神遅滞児(ダウン症を含む)および自閉症の親子関係

生まれてすぐ、それと分る心身障害を親が医師から知らされたとき、大きなショックをうける。しかし、大ていの場合、一定の経過を辿って、次第に子どもの障害を認め、それをうけ入れるようになる。しかし、この際、周囲の専門家が親の気持ちをしっかりと把握し、適切なはげましと子どもに対する具体的な指導の方法を親に伝えて行く必要がある。この際、ダウン症をはじめとする精神遅滞児にも乳児期からの超早期療育が有効なことを親に伝え、子どもが次第に成長し伸びて行くのを親が助けることができることを十分に理解してもらうようにする必要がある。この際とくに親からの言語的働きかけが重要である。自閉症の場合には、2歳すぎでないと診断が確定しないが、自閉症は思いの他対人関係に過敏なところがあることを念頭においておくことが重要である。しかし、対人接触の障害はずっと続き、とくに自閉症児が周囲の人の気持ちを読みとることが非常に困難であることを念頭におくことが大切である。この点については具体的な場面での身の処し方を、くり返し子どもに指導して行く必要がある。このことは幼小児期だけでなく思春期以降になっても続ける必要がある。

Ⅱ．登校拒否、子どもを代理としたMunchansen症候群、神経性食欲不振症の親子関係

これらの狭義の情緒障害は、その原因として親子関係の歪みが大きな役割を果たしている。またそれと同時に、社会的要因も無視することができない。

登校拒否は大別すると挫折型と未熟型に分けられる。挫折型では自我の独立をなしとげようとして、うまく行かず、登校できなくなってしまう。未熟型では幼い頃から過保護の状態で育ち、耐性に乏しいことが登校不能の背景になっている。しかし、欧米においては登校拒否は親子の分離不安が今でも最大の要因とされており、日本とはやや背景が異なっている。昨今、いじめの問題が大きな教育問題となっているが、こういった要因が日本では大きく関与し、登校拒否の頻度が非常に高いと考えられる。

子どもを代理としたMunchansen症候群は、むしろ子どもの虐待の一種と考えられる。しかし、その背景に親、ことに母親の人格的障害がひそんでおり、根は深い。

また神経性食欲不振症では挫折型の登校拒否

とよく似た心理的背景がある。しかし、娘と母親との心理的結びつきが強く、父親の影がうすいことが特徴的である。父親の権威がうすれ、母性社会化の傾向が目立つ最近の社会的変化が、その原因として一役買っていることが注目される。

Ⅲ．いじめっ子の親子関係

いじめの背景は複雑な要因が働いている。1つには現在の学校のあり方が問題となる。それと同時に、著しいいじめは従来の非行と共通する所が多い。しかし、もっと軽いいじめは、幼児期からの発達課題を子どもが十分のり越えていないという時代的背景も大きく働いている。現時点では「いじめ」の全貌を十分捉える段階に至っているとはいえない。そこで事例を1つ1つ検討して行くことが重要であると思われる。

症例:腹痛を主訴として入院した「いじめっ子」とくに親子関係を中心に。14歳(中学3年生)の女児。

家族は16歳の高校性の姉、および父(47歳)、母(43歳)の4人家族であった。父は建材店に勤めているが大酒家で母親との折り合いがよくいっていなかった。母親はガス器具工場で働いている。

本人の既応歴としては、生下時体重は2,600gで、その後の発育も普通で、著患はなかった。

小学生の頃から本人はよく嘘をつき、ともすればクラスで孤立し、人気取りのためクラスの子どもにお菓子をくばったことがあった。

中学に入学した時、姉が中学3年に在学しており、しかも番長グループであった。その関係で、本人も番長グループに入って行くようになった。はじめは上級生よりヤキを入れられて撲られたり、撲れといわれて他の子どもを撲ったこともあった。

中学2年になると、本人は同級生より一目おかれる存在となり、仲間何人かで同級生をいじめて撲ったことがあった。学校の先生からこういったことで注意をうけると、逆に先生に撲りかかったことがあると本人は述べている。中学2年のときに、一級上の上級生より腹部を蹴られたことがあり、それ以後、よく腹痛を訴えるようになった。そのため学校も休みがちとなり、あちらこちらの病院を受診するようになった。中学2年の9月に虫垂切除の手術をしたが、その後も腹痛はよくならなかった。

中学1年の頃から両親の間がうまくいかなくなり、離婚の話が起こって来た。また中学1年の6月に学校の先生が家庭訪問に訪れることになっている日に、その直前から急に息苦しくなり、救急車で近医を受診し、過換気症候群と診断されたことがあった。

今回入院するようになった契機は、中学3年の夏休みの8月24日に、友人、友人の兄とそのガールフレンド、の4人で西多摩の自宅から江の島へ自動車で海水浴にいった。その日の夕方、帰ろうとしたところ、たまたま1人の女性が数人の男性に乱暴されているのを目撃した。その時はかかわり合いになることをおそれ、そのままにして帰ろうとしたが、あとで警察に知らせればよかったと後悔している。帰途、車で道路が混み、帰宅したのは夜中の3時頃であった。帰宅して間もなく息苦しくなり、紙袋を口にあてて呼吸をしたがよくならず、救急車で近くの病院に行った。その病院で、本人は嫌がったが、右上腕に注射をされた。2－3分して全身がしびれて来たが、呼吸は次第に楽になって来た。翌8月26日に呼吸困難はなくなったが、右上肢および左下肢が動かなくなってしまった。この状態が改善せず、9月10日に杏林大学小児科に入院した。

入院時、右上肢は殆んど動かず、左下肢は力が十分入らず、左下肢を引きずって歩く状態であった。同時に右肘関節より末梢、および左膝関節より下部に手袋状ないし靴下状の感覚脱失がみられた。また視野もラセン状であった。臨床検査ではとくに異常はなく、ヒステリー性のものと診断された。入院後、徐々に運動障害、

感覚脱失は改善されたが、それと交代してまた腹痛を訴えるようになって来た。その他、排尿痛も訴えたが、尿道口、尿に異常はなかった。歩行も改善し、右上肢もかなり動かせるようになったので、9月21日に退院させた。本人は退院することを余り喜んでいなかった。今回の入院では、海水浴に行ってから具合が悪くなったというのみで、母親からも本人からも、小学校の時の状態や中学に入ってからのくわしい状況は何も聞き出すことはできなかった。

退院後、運動障害は消失したが、腹痛が続き、食後に必ず嘔吐するようになり、10月14日に再入院した。しかし入院後は嘔吐はみられなかった。ただ右下腹部の痛みを強く訴えていた。しかしその様子は大げさで、いかにも周囲の人の関心を引く風であった。腹部の超音波検査、消化管のレントゲン検査、産婦人科の受診を行ったが、身体的にはまったく異常は認められなかった。

主治医が学校での状態を知ろうとして、本人および母親が申し立てていた在籍しているはずの中学校に電話をしたところ、すでに2年1学期の終わりにB中学校に転校したとのことであった。その理由として、本人が腹痛を訴えるようになったのは、学校で腹部を蹴られてからだと父親が学校に抗議し、警察に訴えると申し入れて来たとのことであった。しかし学校でよくしらべた所、それほど大したことではなく、「訴えるなら受けて立つ」と返事をしたところウヤムヤとなり、学校に居づらくなったのか転校の話が出て来た。転校したB中学でもうまく行かず、2学期間在学しただけで、再びC中学に転校した。この間、腹痛は続いていた。このためF病院に通い治療を受けていた。しかしC中学校も2ヶ月通学しただけで、もともとの住居に近いD中学に転校した。問題のある生徒ということで、この中学校では学校からは特別な目でみられ、1日だけしか登校していない状態であった。この間、腹痛が続き、各地の病院を転々とし、中学3年の9月に先に述べたように右上肢、左下肢の運動障害、感覚脱失を主訴として第1回の入院となった。

第2回の入院中、上記のことが判り、本人と母親は申しあわせて、事実をかくし、嘘偽を述べていたのであった。このような事情が判明してからは、本人は少しづつ本当のことを話し出したが、母親は依然として否定をしていた。しかし、父親と母親と同席の医師との面接の場で、母親は父親にたしなめられて嘘を言っていたことを認めるようになった。しかし、この場で父と母とが口論となり、母親は父親や父親の親戚が母親や本人のことをことさらに悪者扱いをするといいつのった。

第2回の入院中、患児は同室の何人かの子どもを自分の子分のようにし、お菓子をとり上げたり、ある子どもの母親の悪口を別の子どもの母親に告げて母親間にトラブルがおこったことがあった。また同室の女の子の手帳をとり上げ、その子のクラスメートの何人かの家に電話をし、「お前は生意気だ。2度と見られない顔にしてやる。」とおどしの電話をかけたりした。このことがその子どもの学校で問題となり、病院へ苦情が持ちこまれて来た。患児の両親にこのことを告げた所、結局自主的に退院することになり、治療は中断することとなった。第2回の入院中、腹痛はかなり軽くなっていたが、すっかり改善されたわけではなかった。退院後、両親は離婚し、母親と娘2人が生活することになった。

以上の経過から次のことが考えられる。父親は大酒家で問題はあるが、話せばかなりよく判るようであった。これに反し母親は、自分が少しでも不利な立場になったり、非難されるようになると、すべて他人のせいにし、父親に代弁させて学校や病院に抗議を申しこませたりした。第2回目の入院中も父親が病院のケースワーカーの所に来て、「母親が言うには、本人は病院でいい加減な扱いをうけ、本人は自殺したいと云っている。」などと訴えたが、病院側から「本人との接触もとれるようになり、詳しく検査している所だ」と説明すると「よく判りました。こ

のままお願いします。」と納得した。子どもが問題をおこしても母親は本人をかばい、「絶対にそんなことはない」と嘘偽の主張をし、非難をかわそうとした。また本人のことで母親自身が少しでも責任をとらされそうになると「学校や病院のやり方が悪い。」と云ったり、本人を責めたてたりした。患児も一方では母親をかばっており、「お母さんは子どもみたいだ。」といい、母親と本児は共生的な関係にあると思われた。父親もこの間の事情は判っていて「娘は母親にいいくるめられている。」と述べている。入院中、同室の子どもの友人の家へおどしの電話をした前日、医師が以前より母親に会いたがっていることをよく承知していながら、母親が本人に面会に来ていることを医師に報告せず、そのことで本人が医師から責められたことがあった。このことは母親の意を汲んであえて報告しなかったと考えられる。電話でおどしていたことが明るみに出た時、「私が退院すれば皆が喜ぶんでしょ。」といったことは、病院の立場を考えたばかりでなく、母親をもかばっていたと思われる。このことは「両親の離婚は私のせいだ。」と本人が洩らしていたことからもうかがえる。本人の学校でのいじめの問題は、いわば母親の気持ちの代弁であるといった一面をもっていたと考えられる。そして本人が訴えている腹痛も自分では処理しきれない問題を背負わされていた結果であると思われる。この意味からすれば、今回の入院では途中で退院し治療は中断してしまったが、本児と母親の心理的分離をはかり、本人なりの自己実現へ導くように治療を続ける必要があったと考えられる。

本症例は「いじめっ子」としては、かなり特殊な例とは思われるが、いじめっ子にもそれぞれの背景があると考えられるのである。

参考文献

1)長畑正道:心身障害児の親子関係－ダウン症乳幼児の親子関係を含めて－、周産期医学、13:2061－2064,1983.

2)Drotar,D,Baskiewicz,A,Irvin,N.,Kenell,J.,and Klaus,M.:The adaptation of parents to the birth of an infant with a congenital malformation:A hypothetical model.Pediat.,56:710-717,1975.

3)Bradley,R.H.,and Caldwell,B.M.:Home Observation for Measurement of Environment,Manual.1978.

4)長畑正道:小児の行動異常－小児自閉症を中心に、東京都神経科学総合研究所研究紀要(昭和54年度),5～15,1980.

5)長畑正道:登校拒否の心理療法、小児内科,14:621-624,1982.

6)末松弘行他編:神経性食思不振症－その病態と治療、医学書院,1985.

7)南風原幸子、長畑正道:子供を代理としたMunchausen症候群、小児の精神と神経,25:19-25,1985.

8)長畑正道:小児精神医学からみた小児の言語障害、音声言語医学、25:155-168,1984.

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究のまとめおよび「腹痛を主訴として入院したいじめっ子の親子関係」

心身障害には精神遅滞、肢体不自由、視覚障害、聴覚障害のほかに情緒障害がある。このような状態の障害児の親子関係を考えるときには、狭義の情緒障害とそれ以外の心身障害とではかなり異なった側面がある。これまで、重度心身障害ないしダウン症を含む精神遅滞および自閉症の親子関係の問題と、登校拒否、神経性食欲不振症、さらに子供を代理とした Munchansen 症候群について、その親子関係について検討して来た。今回はこれまでの研究のまとめと、とくに最近問題となっている「いじめ」の背景についてその親子関係に焦点をおいて報告する。